

## ドメスティシテイの模倣と懐疑

『ゲリー家と友人たち』における家庭的人種暴動

増田久美子

## I

アメリカ黒人作家フランク・ウェップの小説『ゲリー家と友人たち』（一八五七）が一世紀以上の年月を経て一九六九年に再版されたとき、この「忘れ去られたバイオニア小説」について、アーサー・デイヴィスは次のように述べている。「われわれ読者は〔北部自由黒人たちの〕清潔で品位のある、管理の行きとどいた家庭に案内され、品行方正なお茶や読書の会に列席する。しかし、何にもまして目を引くのは、話し方や洗練された作法、道徳観、そして金もうけにおいて、最上の白人のよ

うになろうとする彼らのその努力である」<sup>①</sup>。その数年後、ジエームズ・デヴリースは「黒人の模倣」という視座を受け、「白人の価値観に同化した黒人たちが」「経済的成功に躍起になるばかりでなく、白人の生活様式や道徳規範を模倣することによって、白人と肩を並べようとしている」と同様の批判を繰り返す<sup>②</sup>。彼らは、この作品がアンテベラム期フィラデルフィアの自由黒人の生活を中心に、異人種間混淆や人種暴動、パッシング等のテーマを本格的に扱うことで、二〇世紀の黒人小説を「先取りする」点では「バイオニア」であると認めながらも、ウェップの描く黒人家庭生活が白人ブルジョアの「感傷的なカ

リカチュア」となっていることに失望してしまう<sup>33</sup>。たしかに『ゲリー家と友人たち』は、一九六〇年代および七〇年代のアメリカ人読者が期待するような黒人抗議小説ではけっしてない。デイヴィスやデヴリースは、主として白人女性読者を取り囲む家庭小説の枠組みが流用されているばかりでなく、そこに登場する黒人たちが白人中流階級の価値観にもづくドメスティシティの規範を模倣していることに、この小説が「忘れ去られた」——歴然と無視された——原因をみるようだ<sup>34</sup>。

しかし、彼らの嫌忌する模倣行為にこそ、一九世紀中葉を生きたアメリカ黒人にとって看過できない意義があった。当時のアメリカ社会において、形式や価値観をまねることの社会的・文化的意味を確認してみると、白人の中流階級の価値観を黒人が模倣する行為は、自身の地位向上や社会の受容のために必須の素養であり、機会であった。つまり、カート・ウィルソンのいう「黒人ミメシス」とは、黒人たちが顕示しうる抑圧への抵抗と自治能力の証明として、白人社会にとって脅威となりえたのである<sup>35</sup>。

だとすれば、フランク・ウェップがアンテベラム期における北部的ドメスティシティの模倣行為をテキスト上で提示しようとしたのは、やはり、白人社会にたいする自由黒人の威嚇的ないし警告的プレゼンスということになるのだろうか。「家庭礼

讃」や「真の女性らしさ」といった言説を集約したアメリカ的ドメスティシティとは、神聖な家庭空間と「弊風」の蔓延る市場を対立させることによって、家庭こそが女性による道徳的感化力、すなわち、「感傷の力」を発揮できる場として掲揚された概念である<sup>36</sup>。しかし、これまで数多くのドメスティシティ研究が例証してきたように、この概念の政治的使用とそのコンテキストを追究しようとすればするほど、逆にその女性的・感傷的・家庭的な感化力は、一九世紀アメリカ社会における人種や階級等の問題をより強力に前景化してしまう<sup>37</sup>。したがって、『ゲリー家と友人たち』というテキストが、家庭小説というフォーマットのみならず、その内実も北部白人のドメスティティを模倣しているのだとすれば、その模倣ゆえにおのずと露呈されるのは、その規範が予期せぬ企図で捻出されてしまうような、別なるドメスティシティにほかならないのではないだろうか。本稿はとくに人種との関係性において、自由黒人にみるドメスティシティ——ロバート・リードファーが「ブラック・ドメスティシティの企て」と呼ぶもの——を探究するものとする。リードファーが述べるように、アンテベラム期における自由黒人たちのドメスティティを通して、家庭的空間が人種闘争の場として政治的領域と化すことは、ウェップの「企て」において最大の目的となっている。そして、本稿はそのよ

うな黒人独自のドメスティシティ概念に立脚しつつ、さらに自由黒人たちの家庭風景を検証することによって、模倣とみえる彼らの行為が、じつは白人の規範であるドメスティシティの反定立的提示であることを明らかにする<sup>8)</sup>。

## II

一八五七年に『ゲリー家と友人たち』がロンドンで出版された当時、ハリエット・ピーチャー・ストウならびに英国の奴隷制廃止論者ヘンリー・ブルーム卿による序文が冠せられたこの作品を、反奴隷制小説であろうと期待した読者は、デヴリースら二〇世紀の読者と同様に難色や困惑を示したかもしれない<sup>9)</sup>。序文にて、ストウが「いま奴隷とされている黒人種は、自由や自治、そして進歩をすることが可能なものでしょうか」<sup>10)</sup>と疑問を呈したあとに展開する物語には、奴隷州での非人道的な境遇に置かれたアンクル・トムたちの姿はなく、読者は白人ブルジョア的家庭生活を営む北部自由黒人に出くわすからだ。

『ゲリー家と友人たち』には中心となるふたつの家族が登場する。ひとつは小説のタイトルに表出されている南部ジョージア州のゲリー家である。その当主クレランス・ゲリーはエミリという混血女性を妻にもつ裕福な白人農園主であり、ふた

りのあいだには「アフリカの血統の痕跡などまるでないように見える」息子と娘がいて、やはりクレランスとエミリという名が与えられている(四)。むろん、法律上は母親のエミリオよび子どもたちは黒人奴隷である。南部の豊かな農園で優しい夫の保護のもとに「申し分のない楽園」(六五)のような生活を送っているものの、ゲリー夫人は自分の子どもたちが奴隷であること、もし事実上の奴隷主である夫が亡くなれば子どもたちは売買されてしまうことをつねに憂い、白人との法的な結婚と子どもの認知が可能な北部への移住を希求していた。一方、北部フィラデルフィアの黒人コミュニティに暮らすエリス家は、教育熱心な大工の父親と母親のエレン、長女エスタ、次女キャディ、末息子チャリーの三人の子どもからなる「たいへんりっぱで勤勉な黒人家庭」(二六)を築いている。家長であるエリスは、所有する「家も土地もすべて」(四九)自らの勤労による成果であることを誇りとする元奴隷だ。安逸な日々を送るゲリー家にたいしてつねに精励するエリス家という、この南部と北部の対極的な両家について、その生活背景が「南部の貴族的・封建的奴隷制社会」と「北部の近代的市民社会」という対立項によって表明されているのはいうまでもないが、なによりもテクストの基底にあるのは、ゲリー家は人種統合という夢想を、エリス家は純然たる黒人種によるドメスティシティ形

成の可能性をそれぞれに表象している点だろう<sup>11)</sup>。ゲリー家がフィラデルフィアに移住し、その北部の地でことごとく悲劇的な結末を迎えることを鑑みれば、ゲリー家に象徴される異人種間混淆は決して称揚されていないことがわかる。ゲリー氏はフィラデルフィアで起こった人種暴動のさいに襲撃および殺害され、そのとき身重であった妻エミリも死亡し、胎児は死産する(リードファーが指摘するように、混血の死産児は白人と黒人の人種の融合を否定する「最たる象徴」<sup>12)</sup>といえる)。また、遺児となり白人<sup>パッセンダ</sup>として生きる息子のクレランスはのちに黒人であることが暴露され、最愛の恋人である白人女性との婚約を破棄されたのち病死してしまう。唯一、黒人として生きることを選び、チャリー・エリスと結婚をする娘のエミリのみが幸福を享受する。このように、この小説は人種統合を謳うわけでもなければ、あからさまに反奴隷制を領導するわけでもない。その意味では、たんに北部自由黒人の中流家庭生活が語られるテクストだといわざるをえないのかもしれない。とはいえ、エリス家にみられるような自由黒人の家庭生活が、いかに白人の中流階級的ドメスティシティを手本に描かれていようと、そこにはやはり人種にかかわる思想の土台があることを否定することもできない。

ストウの序文にあるように、アンテペラム期フィラデルフィ

アには「ひとつの巨大な階層」として「(黒人)自身による特異な社会」<sup>(13)</sup>が形成されていた。実際、この黒人コミュニティは北部最大の自由黒人人口を擁するばかりでなく、ジェームズ・フォートンやロバート・パーヴィスら黒人指導者たちを数多く輩出し、全国黒人集会をはじめとする黒人運動の拠点としても重要な北部黒人社会のひとつに数えられていた。また、このコミュニティは黒人富裕層の洗練された生活や黒人教会をはじめとする、種々の整備された組織の存在という点でも知られていたのだが、そのような自由黒人たちのブルジョア的な日常が展開される一方で、じつは酷烈な人種差別にもさらされ、同コミュニティでは一八三四年から一八四九年のあいだに大規模なものだけでも六度にわたる反黒人暴動が生じている<sup>14)</sup>。『ゲリー家と友人たち』にはそのようなフィラデルフィアの自由黒人の姿や、小説のクライマックスとなる人種暴動の場面が克明に——ふたたびストウの言葉を借りれば「嘘いつわりなく」<sup>(15)</sup>——語られている。ゆえに、アンテペラム期における黒人たちのドメスティシティを検証するにあたり、中流家庭のエリス家や暴動のさいに中心地となるウォルターズ邸に着眼することは、当時の自由黒人を取り巻く実情を知るうえでもきわめて有効であろう。

『ゲリー家と友人たち』において、黒人を主体とするドメス

ティンティイはどのように形成されているのだろうか。本稿が依拠するドメスティシティという概念は、清潔な家庭という女性の領域を基盤とするドメスティック・イデオロギーが政治化される作用、ないしその有りようをさし、ふたたびセアラ・ヘイルの表現を拝借すると、それは「弊風」とみなされた男性的空間である市場との性差的对立領域となっている。ことにアンテベラム期アメリカにおいては、奴隷制によって家庭内に混入される「不浄」（無秩序）から家庭の「清潔さ」を救出する必要性が生じるため、奴隷制（不浄・無秩序）に抗して求められる

家庭内の秩序こそが、言説上の「清潔さ」として捉えられる<sup>14</sup>。このようなドメスティシティと奴隷制の関係を社会改革として目指した（つまりは、政治化した）一九世紀アメリカ文学のテクストといえ、ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』（一八五二）が代表的であろう。ジリアン・ブラウンによる「ダイナのキッチン」の分析にみられるように、共和制初期の「共和国の母」からヴィクトリア時代の「真の女性らしさ」にいたるドメスティシティの政治化という伝統において、まさに政治的な社会改革とドメスティシティを融合させたテクストが、この反奴隷制家庭小説のなかで実現されている。女性の聖域とされるキッチンの描写にかんして、黒人奴隷ダイナが主導する南部の「無秩序なキッチン」と、北部

クエーカー教徒のレイチエル・ハリデー夫人が管理する「秩序ある整然としたキッチン」との対称性は、奴隷制が市場と家庭の境界線を瓦解し、その不浄や無秩序が家庭に持ち込まれる危険性を意味するものとなっている<sup>15</sup>。

『ゲリー家と友人たち』の場合はどうか。南部の大農園主であるゲリー家の自邸にはまさにその奴隷制という「不浄」ばかりか、そもそも異人種間混淆という「不潔」も浸食してしまっているため、読者は物語冒頭の「裕福な南部農園主の家庭では生活の必需品」とされる「ご馳走の品々」（一）で彩られた豪華な食卓のうえに、言説上の不浄や不潔を重ねることができらるだろう。このようなゲリー家にたいして反射鏡的な役割を果たしているのが、「清潔」を強調するエリス家である。エリス家の清潔さは、おもに無類の掃除好きである次女のキャディによって体现されている。彼女の清潔への執着は異常なほどで、ときにヒステリックでさえあり、とりわけコミカルに描かれるキャディの清潔志向は、「感傷的カリカチュア」と嘲弄するデヴリースのような読者であれば、諷刺画家エドワード・クレイによるブルジョア黒人のカリカチュアを喚起するのだろう<sup>16</sup>。しかし、クレイのカリカチュアを黒人であるウェップ自身が自虐的にテクスト化することは、じつはキャディの清潔志向が白人のそれとは異質であることを示唆している。

ストウやキャサリン・ビーチャーらの説く「清潔」が、家庭の主婦の「整頓」や「秩序」の習慣の確立にあってたとすると<sup>17)</sup>、エリス家のそれは掃除という行為そのものをさす。そこに、自由黒人たちが創出しようとするドメスティシティ特有の清潔への欲求をみることができるとは。

キャディは訪問客がくるという知らせにかなり立腹したようすだった。彼女はこう宣ったのである。何もかもがふさわしくないわ。家が見るに堪えないほどめちゃくちゃな状態よ。腰を下ろす場所さえほとんどないじゃない。すると彼女は、午後には元氣よく床みがきや掃き掃除をするための準備に取りかかったのである(四五)。

エリス家の家庭はけっして整然とした状態にあるわけではなく、むしろ「めちゃくちゃな状態」(a state of disorder)にあり、この無秩序はとうぜん奴隷制の「不浄」を想起させる。だが、キャディは「わき目もふらずに小さな客間を占拠して、たちまち驚くばかりのきれいな状態(an astonishing state of cleanliness)にして」しまおう(四五)。「誰よりも根気のある家政担当」(二六)と渾名されるキャディこそが——元奴隷の母親エレンではなく——家庭内の汚れを一掃し、一家の清潔の守り手とい

う役割を果たす。彼女にはゲリー家を蝕むような市場と家庭空間の混乱や、異人種間混淆の「不潔」を食い止めうる潜在力や実行力が付与されているのである。つまり、白人の清潔好きをまねるといって、いっけんクレイのカリカチュアを穏やかにパロディ化するウェブのテクストは、実際にはキャディの清掃行為それ自体にみるドメスティックな力こそが、自由黒人のドメスティシティであることを暗示しているのだ。

ではなぜ、本来ならばハウスキーパーとして「家庭の帝国」を掌握する母親の役目が、エリス夫人に課されていないのだろうか。エレン・エリスは法的には自由黒人であっても、針子である彼女と得意先である白人女性トマス夫人との関係にみられるように、まるで女主人に追従する黒人召使いのような人物である(じじつ、エレンはトマス家の召使い奉公していた過去をもつ)。エレンがトマス夫人に息子のチャーリーの教育について相談したい、「ナンセンスですよ、エレン!……」黒人の子にラテン語やギリシア語が何の役に立つというのです?」(二五)と押し切られ、トマス夫人の忠告に従ってチャーリーをトマス家に奉公に出してしまうのだ。ウェブのテクストにおいて、黒人が白人家庭に奉公することの罪深さは明確に語られている。エリス家の隣人で黒人指導者の人物であるウォルターズは、チャーリーがトマス家で奉公しているという知らせを

受け、次のように厳しく問いたです。

あんなに頭のよい子を召使いに出不すなんて、恥ずべきことだ。  
〔……〕あの年齢の子どもがいちばんしてはいけないのが召使い奉公だ。固定給で働いて、それに頼る習慣がいったん身につくと、大人になったときに、このさき一生それだけの月給が保証されれば文句なく幸せだと思うようになってしまう。トマス家のロバーツのような間抜けで卑屈な人間になってもいいのか？(一六二)

ひとたび従属関係に慣れてしまうと、その習癖から抜け出すことの困難さが召使い奉公には伴い、そして、たとえ黒人が賃金の得られる「自由労働」に従事しているとしても、それは事実上の家内奴隷となることに等しいと、ウォルターズは忠告する。汚れ(奴隷制)を家庭から閉め出すべき母親自身が、逆に自分の息子を奴隷制という「不浄」のなかに組み込んでしまう。それゆえエリス夫人には、家庭の衛生を守る母親的・家庭的権能が付与されないのである。

また、キャディという優秀なハウスキーパーによって保護されるエリス家の家庭の内部空間は、家庭外部の白人たちの空間によっても顕著な対称性をなしている。それは、作品の「悪」

を担う白人弁護士ジョージ・ステイヴンスの「陰気で生気がなく、かび臭く不快な空気を漂わせて」いる彼の「薄汚い」仕事場や、「世間に見捨てられたような顔つきの」アイルランド系白人移民がたむろする酒場(一七三)にみられる。このステイヴンスこそ人種暴動の首謀者として、クレランス・ゲリーを殺害する人物であり(彼は富裕黒人であるウォルターズと、黒人の妻をもつゲリーとその家族に憎悪の念を抱く)、また、自由黒人を敵視する白人移民たちは、暴動を起こす群集である。彼らの占取する場はその空間の物理的な不衛生と、白人たちの奸策をめぐらす「不潔さ」を強調し、「汚れ」を撃退しようと努力するエリス家の家庭とは対極に置かれている。

さらに、エリス家に体現される黒人主体のドメスティシティに関連して、家庭の外部空間に着目してみたい。「ステイヴンス氏、悪者の手に落ちる」と題された第十八章には、研究者たちから注目される「ステイヴンスの変装による人種と階級の横断」の場面がある<sup>18)</sup>。人種暴動計画が準備されつつあるなか、ステイヴンスは自身の素性を隠して下層階級のアイルランド系移民らに紛れ込むため、古着屋で変装をする。彼は「ひどくみすばらしい、くすんだ茶色で特異な裁ち方をされたコート」を着込み、鏡のなかの自分に驚いてしまうほど「完璧」に労働者階級移民に化けるのである(一八四)。結局その夜に悪

事は行われず、その姿のまま帰宅の途につくのだが、じつはステイヴンスは「悪名高い消防団員」の衣装をまとしており、彼がまさに歩いているその地域周辺は「もっとも悪質でもっとも勢力のある敵陣営のまった中」だったのである（一八六）。不幸にも消防自警団に遭遇してしまったステイヴンスは、リンチを受けてしまう。「彼の唇はコンゴの黒人顔にみるそれよりも大きくふくれあがり、片眼が驚くほど腫れあがっていた。身体にタールを塗られたせいで、彼の姿は読者が想像さえつかないものになっていた」（一八九）。一団が去るとさらに不幸なことに、ステイヴンスと階級を同じくする「身なりのきちんとした」男たちに囲まれてしまう。そのなかには知人もいたため聾啞であることを装ったが、やはり彼らからも虐待を受ける。ステイヴンスの身体を樽の水に繰り返し投げ込み、そして最後に、彼の顔に石灰をこすりつけようとする（一九〇—一九一）。「——邪魔しないでくださいよ。こいつを白人にしてやるんです。立派な同胞にして、国会議員に立候補させてあげましょうよ」（一九一）。この「白人化」はかろうじて回避される。

生料のアメリカ白人で中流階級のステイヴンスが、まずは「変装」（一八四）によって、アイルランド系労働者階級へと民族的・階級的横断をし、かつ、タール塗りという「黒人化」によって声を奪われる（「声で正体が見抜かれることを恐れ、口

を開かないことにした」（一九〇）。さらに黒人化したステイヴンスを石灰で「白人化」させ、議員への立候補という政治的権利を供与させようとする。アンナ・エングルによれば、南北戦争前後期における「階級差を認めたくない」アメリカ民主主義社会では、階級問題を人種論にすりかえて議論する言説が数多く存在したという。それはアイルランド系移民がアフリカ系アメリカ人を「黒人化」させることによって、自らは「白さ」を得て（つまりは、アメリカのシチズンシップを獲得して）、アフリカ系アメリカ人の隷属状態を正当化する人種差別主義へと展開していったのである<sup>19)</sup>。すると、ひとりの白人男性に生じた階級的・人種的横断の場面は、次のように読むことができるだろう。「階級」に流動的な特徴が認められるのと同様に、「人種」もまた流動的である——いふならば、人為的である。ウェップのテキストは、エドワード・クレイのカリカチュアにみられる黒人観や、当時の似非生物学的見解にもとづく人種観など<sup>20)</sup>、巧妙に練り上げられた人種というカテゴリーに異論を唱えているのである。

ステイヴンスがようやく自宅に戻ったとき、彼の妻は玄関口に現れた「真っ黒顔」の「見るもおぞましい姿」にひるんでしまうものの、それが夫であるとわかると、彼女は玄関の「ドアを閉めて鍵をかけ、奥の部屋へと夫について行った」（一九

二)。このようにして安全性が確保された家庭空間において、妻は夫の顔からタールを拭おうと悪戦苦闘する。ところが「彼の腫れあがった顔から皮膚がだいぶ擦り剥がされて (scraped off)」（一九三）しまうように、ステイヴンス家での「汚れ」の除去という清掃行為は、清潔さを保持しようとするドメスティックな機能というよりも、文字通り、剝がされた皮膚の下にははたして何があるのかという人種カテゴリーの人為性を問う描写となっているのだ。

### III

ステイヴンスやアイルランド系移民たちの不衛生さとは異なり、フィラデルフィアの黒人コミュニティが「世界でもっとも静かで清潔な町のひとつ」（一一五）であることは、その地に到着したばかりの南部人ゲリー夫妻の眼によっても認識されている。「なんてすてきなところなの！ すべてが明るくて真新しいわ。まるで舗道も玄関口も、一日二回は掃き掃除をされているよう。ねえ、あの家は染みのひとつもないわ」（一一六）。夫人は馬車から見える黒人コミュニティの清潔さによって、南部での陰鬱な精神状態から本来の明るさを取り戻す。夫のほうもまた、黒人の子どもたちが教科書入りの鞆を抱えて通

りを「元氣よく」駆けゆく姿に、フィラデルフィアが「ジョージアとはだいぶ違う」とつぶやかざるを得ないようすを見せる（一一〇）。

黒人コミュニティの衛生上の清潔さや、学童にみる教育理念上の公正さに加え<sup>21</sup>、ゲリーをもっとも驚かせたのは、ウォルターズにみる人物像とその自邸であろう。不動産業を営むウォルターズは、莫大な財を私有するフィラデルフィア随一の黒人富者である。また、当時の黒人にたいする人種言説を対蹠化するかのようには、「身長は六フィートを超え、すばらしく均整がとれており、漆黒の顔と滑らかでつややかな肌」の持ち主であり、「鷲鼻に細い唇、広い顎は、アフリカ人の容姿とは正反対で、たいへん非凡な顔立ち」（一二一—一二二）であると形容されている。この人物は、クリストファー・マルヴィによれば、アフラ・ベーンの『オルノコ』（一六八八）からマーティン・ディレーニーの『ブレイク』（一八五九—六二）にいたるまでの、「英雄的奴隸」という系列上にある純血の黒人男性と目され、たとえば、ウィリアム・ウェルズ・ブラウンの『クロールテル』（一八五三）に描かれているような「悲劇の混血人」とは一線を画す特徴があるという<sup>22</sup>。その非アフリカ的な容貌もさることながら、ゲリーがウォルターズをはじめて訪問し、客間に案内されたさいに描写される彼の邸宅は、ゲリーが

「すっかり驚愕してしまうほど」の「気品」があり、「巨万の富のみならず、洗練された趣味や優雅な嗜好」を示していた（一一一）。内部空間は、ただ二点をのぞけば白人上流階級を模倣したドメスティシティが具現化されている——つまり、客間に「ある黒人将校の肖像画」（一一二）が飾られていたこと以外は、ゲリーは、白人家庭ではけっして眼にすることのありえない「將軍の格好をした黒人」像に釘づけになり、「いや、まったく、相当めずらしいものですね。（……）」とくに、わたしのような南部出身の者にとっては、これは誰なのですか？」とたずねると、ウォルターズは「トゥーサン・ルヴェルテール」と返答する（一一三）。

多くの白人奴隸制廃止論者にとって、ハイチ革命の英雄的黒人指導者であるトゥーサン・ルヴェルテールが自由と平等の象徴であったことはよく知られているが、じつは南部の白人農園主たちにとっても、仏領サン・ドマングにおいて黒人奴隸を管理し、事実上の植民地支配者であったトゥーサンについての才能はすぐれて好意的に評価されていた<sup>231</sup>。したがって、この場面におけるゲリーのトゥーサンについての無知は、彼がプランテーション経営者としての能力に疑念を起こさせる一方、軍装のトゥーサンの肖像画を仰ぐゲリーが、「この人物は自分の信念を行動でまっとうさせるタイプのようですね」（一二

三）と述べるとき、読者はこの肖像画によって表現される黒人の資質が、まさしくウォルターズその人に投影されていることを予知する。ウォルターズの自邸（家庭空間）はたんなる白人上流階級家庭の模写ではなく、黒人革命の闘士となりうる人物造形の場として機能しているのである。そして、その指導者としての彼の能力は、ステイヴンスが画策する人種暴動によって見いだすことができるのだが、ここでは「人種」を理由とした暴力行為が、家庭空間において展開および帰結されている点に焦点を当てたい。

『ゲリー家と友人たち』に描かれている人種暴動は、一八三四年から一八四九年の間に実際に起こった複数の反黒人暴動が組み合わされ、フィクション化されている<sup>232</sup>。フィクションとはいえ、小説ではおよそ五〇頁分が暴動場面に割かれ、白人暴徒が黒人コミュニティを攻撃する描写は圧巻であり、アンテベラム期の反黒人暴動という社会的・歴史的現実を読者に提供しているという点で、これをウェップの小説における大きな功績のひとつとして数えあげる研究者もいる<sup>233</sup>。暴動により、ゲリー夫妻の殺害と胎児の死産、エリス氏の身体的・精神的損傷、エリス家の焼失などの数々の悲劇が生じ、登場人物たちのその後的人生を大きく揺るがすが、まさにこの人種暴動こそが黒人家庭の領域を人種闘争の爆心地にさせ、黒人コミュニティを堅

固にするものとして、黒人たちのドメスティシティが白人の規範とは異なるかたちで出現する契機となっている。

黒人たちは白人暴徒にたいする防衛のために、ウォルターズ邸に結集する。同じ黒人中流階級でもエリス家のような中庸の経済力をもつ黒人から、チャーリー・エリスの悪友キンチのような貧困の黒人にいたるまで、貧富差を超えて黒人たちがその場に集い、家庭という空間を基盤に黒人コミュニティの互助的かつ政治闘争的機能が強化されていく。「要塞」(二〇三)と化したウォルターズ邸では彼の指揮のもとに黒人たちが応戦するという緊迫した状況となるが、では、このような家庭という女性的空間であると同時に闘争の砦となった非女性的な場において、エリス家の女性たちはどのような行動をとっていたのだろうか。母親のエレンは大量の銃や弾薬を目の当たりにして、「なんて恐ろしい！　こんなにたくさんの武器が散らばっているなんて、気がどうにかなくなってしまいそうだわ」(二〇四)と恐怖心を隠せない。ところが、一家のハウスキーパーである掃除魔の次女キャディは、きわめてドメスティックな闘いをキンチとともに展開するのである。

ついに白人たちがウォルターズ邸に侵入し、黒人側の防戦が破られそうになったとき、邸内の「上階」から暴徒らの頭に「ひりひりと灼ける湯」(二一四)がまかれ、危機を免れる場面

がある。この熱湯の正体を確かめようとウォルターズが二階へと急ぐと、キャディとキンチが湯沸かし釜に唐辛子入りの熱湯を準備していたのである。

「わたしたちは熱湯で闘うわ。みて」とキャディは柄杓を持ちあげた。「これがわたしの武器よ。やつらはキーキー泣くと思うわ」。

「よくやった、キャディ。(……) 非常によくやってくれた。すっかりやつらを追い出してしまったようだ。(……) 熱湯をたっぷりと用意しておいてくれたまえ」(二一四—二一五)。

キャディはやかんや柄杓の他にも、キンチが仕掛けたという「柄の端に大きなブリキ缶をぶら下げた箒」をウォルターズに披露する(二一五)。キャディたちの闘いぶりを「幼稚な秘密兵器」<sup>(註)</sup>によるものとみなすのではなく、ここで注目すべきは、家庭的小物を武器に家庭内の安全な「上階」から防衛を遂行していること、また、いわば防衛の指揮官であり、トゥーサン・ルヴェルテールになぞられるウォルターズによって、キャディが入り口の守り手<sup>キーパー</sup>に任命されたことである。キャディは母親のエレンにはできない重要なドメスティックな役割、すなわち白人暴徒という「汚れ」の侵入を防ぎ、一掃するという

家庭に要塞の守り手を完遂する。

もうひとりのエリス家の女性、長女のエスタはどうであろうか。通常、彼女は母親とともに縫いものをし、家庭の領域から逸脱することのない穏やかな日常を送る黒人女性であり、その生活風景は中流階級の白人女性に紛うものがある。だが、エスタはこの人種暴動によって女戦士に変貌し、北部的白人ドメスティシティの規範を破ってしまう。目の前の武器におどおどする母親を横に、「わたしが男だったらよかったのに」と語り始める。「今日、通りを歩いていて、おおぜいの罪のない、わたし自身のような人たちを見たわ。あの白人の卑劣なやつらに、少しの危害さえ加えたことなんてない人たちを。〔……〕やつらを絞め殺してやりたいと思ったわ。わたしが男だったら、その場でやつらを殴りつけていたでしょうね。次の瞬間には殺されてしまうかもしれないけど」(二〇五)。エスタのことばのあとに母親のエレンは、「そんなふうには言ってはダメよ。女性らしくないし、キリスト教徒らしくないわ」(二〇五)〔傍点引用者〕と嘆願するが、さらにエスタは「ピストルを手にとり」、「ボンネット帽を脱ぎ捨てて」、ウォルターズに弾薬の装填方法を学び、彼とともに闘うことを自らの意志で決める(二〇六)。まさにエスタの「女性らしくからぬ、キリスト教徒らしくからぬ」言動は、彼女をドメスティシティの規範や模

倣を超えたヒロイックな黒人女性像に仕立てあげ、同時に、白人女性たちが「女性らしく、キリスト教徒らしく」であろうとすることの意味の問い直しをも迫る。つまり、家庭空間での人種暴動(清掃作業)をつうじて明らかにされた黒人独自のドメスティシティは、その原理的なドメスティシティ——人種間ヒエラルキーを解消するはずの、キリスト教的・道徳的感化力、すなわち、女性の「感傷の力」<sup>26)</sup>——への懐疑をも浮き上がらせるのである。この疑念をともしなう白人ドメスティティのある種の胡散臭さは、たとえば、ステイヴンスの妻や彼女を取り巻く中流階級の白人女性たちによっても描写されている。隣人となったエミリー・ゲリーが黒人だと知ったとたん、ステイヴンス夫人がゲリー家の子どもたちを学校から閉め出すための画策を開始し、彼女はその工作のために、友人であるキニー夫人や学校教師ミス・ジョーダンを訪れる場面がある。キニー夫人は「パタゴニア伝道のための女性宣教師の会」(一五四)を主催する人道的キリスト教徒であり、また、ミス・ジョーダンは「ほんのわずかアフリカ人の血が母親にあるだけで、子どもたちを追い出すなんて不当ですし、キリスト教徒らしくありません」(一五七)と断言するほどの敬虔な信者であるが、結局ふたりはステイヴンス夫人の思惑通りに黒人姉弟の退学に荷担してしまう。このように、北部の白人女性らが規範とする

ドメスティシティは、黒人のドメスティシティとの並置によって、より顕著にその人種観を露呈してしまうのだ。

#### IV

人種暴動を通してテクストが解き明かしたのは、黒という色（黒人）と「汚れ」を同一視していた当時の一般概念を反転させ<sup>(28)</sup>、白人という人種的な「汚れ」を家庭の領域から一掃し、内部空間を浄化するという黒人が生み出すドメスティシティのダイナミクスである。とりわけ、ドメスティックな武器を手にするキャディと、ドメスティシティの規範を逸脱して闘うエスタというふたりの黒人女性の行動により、ウォルターズの家庭空間が保守されたことは、彼女たちの母親エレン・エリスや混血女性エミリー・ゲリーが成し遂げることのできない行為として、新しい黒人女性像の提示をも意味する。

読者はウォルターズ邸にあらたに加わった「トウーサンの肖像画と真向かいに掛けられている」母子像——エスタと彼女の子どもたちの肖像画——が、いまや「その黒人の白人よりも高い位置に掲げられている」ことを目撃する（三三三）。暴動後のエスタとウォルターズの結婚、ならびにキャディとキンチの婚約は、黒人コミュニティの結束や拡大を意味するものと捉え

られているが<sup>(29)</sup>、この母子像は、同コミュニティにおける新しい世代の到来が告げられているだけでなく、ウォルターズ邸が要塞としての機能を終え、日常的な家庭へと回復したことの証ともなっている。しかも、奴隸制という「不浄」や異人種間混濁という「不潔」が排除された、黒人家庭の安定を強く示唆するものとして。

『ゲリー家と友人たち』は、エリス家の息子チャーリーとゲリー夫妻の遺子エミリーの結婚式で幕を閉じる。その祝賀の食卓で給仕されるのが——まるまると肥えた肉厚の七面鳥のローストから、イリエガメのスープ、豊かな牡蠣料理といった北部名産品の皿にはじまり、南部特産の色とりどりの果実やデザートで締めくくられる——まさに「アメリカの食事」（三七七）〔傍点引用者〕である。共和国アメリカの「食事」にありつけるのは、白人社会に見捨てられてしまうゲリーの息子クレランスではなく、黒人社会と白人社会の間をさまようゲリー夫人のいとこジョージ・ウィンストンでもない<sup>(30)</sup>。自身が純血黒人であるか混血人であるかにかかわらず、黒人としてアメリカ社会に生きることを決意して、エリス家の一員となるエミリーのような人物である。それは、『アングル・トムの小屋』において自由を求める黒人ジョージ・ハリスたちが、アメリカを去らなくてはならなかった結末や、また、セアラ・ヘイルの小説

『リベリア』（一八五三）に登場する解放奴隷たちが、西アフリカのリベリアの地で白人の規範たるドメスティシティの模倣を通じて、家庭づくりに励む植民活動とは大きく異なっている<sup>(31)</sup>。ウェブのテキストに打ち出された自由黒人のドメスティシティは、白人女性たちが盤石としたドメスティシティに寄り添うふりをしながら、しかし同時に、「女性らしさ」、キリスト教徒らしさを旨とする白人ドメスティシティへの疑問、す

なわち、キリスト教的道徳性を婦徳とする「感傷の力」が人種構造を強固にしていることを暴き出してしまふのだ。さらに、白人ドメスティシティに懐疑的なまなざしを向けるウェブのテキストは、ブラック・ドメスティシティを成立させることによって、黒人たちがアメリカ社会で家庭を築くことの可能性をも提起しているのである。

## 註

- (1) Arthur P. Davis, "The Garies and Their Friends: A Neglected Pioneer Novel," *CLA Journal* 13, No. 2 (1969): 30. キイザイスの「忘れ去られたマイオニア小説」論は、一九六九年版『ゲリー家と友人たち』の「序文」を増補したもの。本稿では一九七七年版のテキストを典拠とする。Frank J. Webb, *The Garies and Their Friends*. Introduction by Robert Reid-Pharr (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997).
- (2) James H. DeVries, "The Tradition of the Sentimental Novel in *The Garies and Their Friends*," *CLA Journal* 17, No. 2 (1973): 248-249.
- (3) Davis, 27-28; DeVries, 248.

- (4) 一九七〇年代の研究のなかには、この小説が「一九世紀的メロドラマ」から「社会的リアリズム」への移行をはたしている点に注目する論考もある。R. F. Bogardus, "Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*: An Early Black Novelist's Venture into Realism," *Studies in Black Literature* 5, No. 2 (1974): 15-20. 一九九〇年代になると、この作品の本格的な再評価がはじまる。おおまかにテーマ別で分類を試みると、黒人の家庭性と主体形成（リードファー、ドゥエイン、ラング）、人種と階級の関係性（オッター、エンゲル、ノヴァツキ）、資本主義的価値観と黒人（レヴァイン、ビーターズ）、黒人作家のテクニク技法（ホルンズ）等がある。Anna Engle, "Depictions of

the Irish in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends* and Frances E. W. Harper's *Trial and Triumph*," *MELUS* 26, No. 1 (2001): 151-171; Anna Mae Duane, "Remaking Black Motherhood in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*," *African American Review* 38, No. 2 (2004): 201-212; Henry Golemba, "Frank Webb's *The Garies and Their Friends* Contextualized within African American Slave Narratives," *Lines Out of Letters: Essays on American Literary Biography and Documentation, in Honor of Robert N. Hudspeth*, ed. Robert D. Habsich (Madison: Fairleigh Dickinson University Press, 2004), 114-142; Amy Shrager Lang, *The Syntax of Class: Writing Inequality in Nineteenth-Century America* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2006), 46-63; Robert S. Levine, "Disturbing Boundaries: Temperance, Black Elevation and Violence in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*," *Prospects: An Annual of American Cultural Studies* 19 (1994): 319-374; Robert Nowatzki, "Blurring the Color Line: Black Freedom, Passing, Abolitionism, and Irish Ethnicity in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*," *Studies in American Fiction* 33 (March 2005): 29-58; Samuel Otter, "Frank Webb's Still Life: Rethinking Literature and Politics through *The Garies and Their Friends*," *American Literary History* 20, No. 4 (2008): 728-752; Carla L. Peterson, "Capitalism, Black (Under) development, and the Production of the African American Novel in the 1850s," *American Literary History* 4, No. 4 (1992): 559-583; Robert F. Reid-Pharr, *Conjugal Union: The Body, the*

*House, and the Black American* (New York: Oxford University Press, 1999), 65-88.

(5) この言葉及それによる白人の中流階級の価値観とは、市民性の責務を含む共和国理念の美德やサブクルトゥア時代の道徳規範を意味する。人種にかかわらず、それらは「模倣」を通じて涵養されるべき期待である。Kirt H. Wilson, "The Racial Politics of Imitation in the Nineteenth Century," *Quarterly Journal of Speech* 89, No. 2 (2003): 89-108.

(6) 本稿におけるメスチンティヤは感傷主義のことだが、その議論を主として依拠するものではない。Gillian Brown, *Domestic Individualism: Imagining Self in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1990), 1-10, 46-47. 「弊風」(contagion) としての表現は、メスチンティヤの重要なメスチンティヤ提唱者のひとり、サラ・ジョセファ・ハイルに由来する。「世の男たちはたゞさういふ縁がござります。女性や子どもたちはやむを得ずかかわるのである」(contagion) から借りたものである。Sarah Josepha Hale, *Ladies' Magazine* 5 (Feb. 1832): 87. 市橋経済や「弊風」とみなしたハイルは、『レディーズ・マガジン』誌(6月号)の「オーデーリス・レディーズ・ブック」誌の編集者である。

(7) メスチンティヤの一般論としての背信的現実の乖離については、参照せよ。Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U. S. Culture* (Cambridge: Harvard University Press, 2002), 24; Lora Romero, *Home Fronts: Domesticity and Its Critics in the Antebellum United States* (Durham: Duke University Press, 1997), 3-9.

(8) リー・エドワード・スタインマンの「フランシス・メスチンティヤ

「」とは、黒人と白人の人種的差異が温存される一方で、「アメリカ人」という括りにおける両人種の「文化的相似性」を認めている。本稿はこの見解とは異なり、白人ドミニオン主義の「懐疑」の検証を試みる。Robert Reid-Pharr, "Introduction to the 1997 Edition," *The Garies and Their Friends* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997), viii.

(9) 出版当時の書評は英国のいくつかの雑誌に掲載されたが、小説の反響を知る手がかりはほとんどない。サミュエル自身がつづけた資料をええしく、彼は一八二八年頃フョラデルフュムで生まれた「自由黒人」であったとされている。『ザリー家と友人たち』以外の作品として、『マホリシヨニスム系雑誌』新しき時代』に掲載された「二匹の狼と子羊」(一八七〇)と、『パーサマン・ソート』(一八七〇)のふたつの短編小説がある。作家の略歴や小説の出版背景等については、以下を参照した。Rosemary F. Crockett, "Frank J. Webb: The Shift to Color Discrimination," *The Black Columbian: Defining Moments in African American Literature and Culture*, eds. Werner Sollors and Maria Diedrich (Cambridge: Harvard University Press, 1994), 112-122; Eric Gardner, "A Gentleman of Superior Cultivation and Refinement: Recovering the Biography of Frank J. Webb," *African American Review* 35, No. 2 (2001): 297-308; Phillip S. Lapsansky, "Afro-Americana: Frank J. Webb and His Friend," *Annual Report of the Library Company of Philadelphia for the Year 1990* (Philadelphia: Library Company of Philadelphia, 1991): 27-43; Samuel Otter, *Philadelphia Stories: America's Literature of Race and Freedom* (New York: Oxford University Press, 2010), 224-226.

(10) Harriet Beecher Stowe, "Preface," *The Garies and Their Friends* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997), ix.

(11) 人種統合をめぐるザリー家の非現実的な「夢想」については、以下を参照しよう。Golemba, 130.

(12) Reid-Pharr, *Conjugal Union*, 68.

(13) Levine, 350; Samuel Otter, "Philadelphia Experiments," *American Literary History* 16, No. 1 (2004): 103-116. 一九世紀のトヨタチンソート社会をめぐる人種暴動については以下の文献を参照した。Theodore Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia: A Study of Ex-Slaves, Freedom, and Socioeconomic Decline," *African American in Pennsylvania: Shifting Historical Perspectives*, eds. Joe William Trotter, Jr. and Eric Ledell Smith (Harrisburg: The Pennsylvania State University Press, 1997), 123-147; Gary B. Nash, *Forging Freedom: The Formation of Philadelphia's Black Community, 1720-1840* (Cambridge: Harvard University Press, 1988); Julie Winch, *Philadelphia's Black Elite: Activism, Accommodation, and the Struggle for Autonomy, 1787-1848* (Philadelphia: Temple University Press, 1988); 鶴月裕典「マンハッタン初期のアンテナにおける反黒人暴動と黒人ローカルコミュニティ」『史苑』第四八巻第二号(一九八八): 一—四三。

(14) 本稿では「清潔」に対立する「汚れ」に関わる用語について、市場の汚れを「弊風」(contagion)と表すほか、奴隷制の汚れを「不浄」(defilement)や「異人種間混淆の汚れ」(卑猥な意味での)「不潔」(obscenity/filth)とされたい表現する。これらの用語区分は、チャボイスが奴隷制を「不浄」と呼び、また異

人種間混淆にしろは、当時この問題を諷刺画にしたチャールズ・クレイのイラストが「卑猥で不潔で下品である」(obscene, filthy, and indecent)と形容されたことである。W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk, Authoritative Text, Context, Criticism*, Norton Critical Edition (New York: W. W. Norton, 1999), 71; Tavia Nyong'o, *The Amalgamation Waltz: Race, Performance, and the Ruses of Memory* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2009), 30.

(15) Brown, 13-38.

(16) 一八二〇年代、クレイが描いた「フアラチヤノブの生活」と題する一連の諷刺画は、白人中流階級層に做ってブルジョアの生活を享受する自由黒人たちが対象として描く。クレイの分析については前掲のタヴィア・ニョングのほかに、以下を参照のよう。Emma Jones Lapsansky, "Since They Got Those Separate Churches: Afro-Americans and Racism in Jacksonian Philadelphia," *African American in Pennsylvania: Shifting Historical Perspectives*, eds. Joe William Trotter, Jr. and Eric Ledell Smith (Harrisburg: The Pennsylvania State University Press, 1997), 93-120.

(17) Catherine E. Beecher, *A Treatise on Domestic Economy, for the Use of Young Ladies at Home and at School* (Boston: Marsh, Capen, Lyon, and Webb, 1841), 144; SuelLEN Hoy, *Chasing Dirt: The American Pursuit of Cleanliness* (New York: Oxford University Press, 1995), 21. ホットェルズ、チャーチャーが実際に「清潔」という用語を使うのは、病人や自身の身体上の清潔を、もしくは衣類や壁等の「白くする」となびかせるものに限定されていた。

(18) Engle, 158-161; Nowatzki, 49-51; Reid-Pharr, *Conjugal Union*, 86-87.

(19) エンゲルは、この「人種と階級の横断」が描き込まれた場面について、人種と階級を容易に結びつけようとする社会の構図にたづね「サモンの挑戦」と読む。Engle, 156-157, 160. #47 この時代におけるマイルランズ系労働者と白人性の問題については、以下を参照せよ。Noel Ignatiev, *How the Irish Became White*, Reprinted (New York and London: Routledge, 2009 [1995]), 106-141; David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*, Revised Edition (London: Verso, 1999 [1991]), 133-163. たおえば、博物学者ルイ・ブガシによる一八六〇年代の黒人種劣等説について、マイルランズを参照のこと。Wilson, 95-96.

(20) ゲリーリーの論文には、「ウィーミズ州で黒人の子どもに読み書きを教えることは、刑事上の犯罪である」(一二〇)とのウエック自身による丁寧な付注がある。これは、おそらく南部の諸事情をあまり解してはならぬ英国の読者を意識したのであるが、そのために南部での教育的「不潔」を強調した効果となるであろう。

(21) Christopher Mulvey, "Freeing the Voice, Creating the Self: the Novel and Slavery," *The Cambridge Companion to The African American Novel*, ed. Maryemma Graham (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 25. #48. ノットマン・ロブサンズキによれば、ウォルターズは当時の黒人エリート層を形成していた指導者の人物たち(ジェームズ・フォートン、ジョセフ・ケイシー、ロバート・ハーヴィス等)をモデルとして造形されていると云う。Phillip S. Lapsansky, 31.

- (23) Alfred N. Hunt, *Haiti's Influence on Antebellum America: Slumbering Volcano in the Caribbean* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988), 84-101.
- (24) Philip S. Lapsansky, 34; Levine, 357-362; Reid-Pharr, *Conjugal Union*, 79.
- (25) Levine, 357.
- (26) Duane, 208.
- (27) 白人ドメスティシティ、ないし女性の「感傷の力」による人種的差異の解消が達成されず、実際にはそのヒエラルキー構造が強固にされてくるとの指摘や、感傷性のパラドクスについて、以下を参照せよ。Kaplan, 24-26; Shirley Samuels, "Introduction," *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in Nineteenth-Century America*, ed. Shirley Samuels (New York: Oxford University Press, 1992), 3-8.
- (28) 一九世紀における黒人と「汚れ」の等価については、以下を参照せよ。Hoy, 92.
- (29) Golemba, 131; Lang, 57.

- (30) ジョージ・ウィンストンは、元奴隷ながらもその勤勉さによって自由をみずから獲得し、外見だけでなく中流階級の価値観を身につけた白人紳士として通用する人物であるが、フェラデルフィアでは「白人として生きるか黒人として生きるか」のどちらか一方を選択するようになり、ヘリスから忠告を受ける（四一）。けれども彼は、自身が「被抑圧的人種」であるために受けなくてはならない「余分な障害」（一四）に直面することを避け、黒人コミュニティでの生活の可能性を拒絶して、海外移住を求めて文字通りテクストから消え去ってしまう。ウィンストンの分析について以下を参照のこと。Levine, 353.
- (31) Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin: Authoritative Text, Background and Contexts, Criticism*, A Norton Critical Edition, ed. Elizabeth Ammons (New York: W. W. Norton & Company, 1994), 333-334; Sarah Josepha Hale, *Liberty, or, Mr. Peyton's Experiments* (New York: Harper & Brothers, 1853), 167-170, 218-221.

(まずだ くみこ／修了生)